

『平家物語』 絵本・絵巻の挿絵について

— 明星大学図書館所蔵本を中心に —

附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面对照表

山本陽子*

序 明星大学図書館所蔵『平家物語』絵本について

明星大学図書館には江戸時代の『平家物語』絵本が所蔵されている。完本ではなく『平家物語』十二巻のうち巻一と巻十二・灌頂巻を欠く十帖であるが、専用の蒔絵箱に収められた現存分は極めて保存がよく、脱漏や汚損もない⁽¹⁾。二百図を越える挿絵が含まれていることは、購買時の記録からも知られていたが、冊子体ゆえに各図を見比べることは難しく、綴糸の傷んでいる帖もあるため、非公開の状態が続いてきた。

そこで詞書を含む全画面の撮影とweb上での全写真図版の公開が志された。当初、明星大学日野校貴重書デジタル保存プロジェクトの一部として第四巻まで撮影した時点で中断されていたが、平成十九年度より新たに「物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化」(平成十九年度科学研究費補助金・基盤研究(C)19520114)の一環として、撮影が再開されたものである。現在、『平家物語』絵本を含む明星大学が所蔵する江戸時代前期の奈良絵本・絵巻類の、図版写真

の公開と書誌・釈文・解説、図版解説、武士の絵画表現の考察を併せたデータベースが構築されつつあり、その一部はインターネットでの閲覧が可能となった⁽²⁾。

全図の写真図版が公開された時点で、個々の挿絵のみを取り出し並べて比較すること、また他の『平家物語』絵の図版と比較することが容易になった。そこで作成を試みたのが、文末に『平家物語』絵本・絵巻諸本の場面对照表⁽³⁾として掲載した、他の『平家物語』絵巻・絵本との挿絵場面選択の比較表である。本論ではこの表を併用しつつ、他本の挿絵と明星大学本挿絵とを比較し、個々の特徴を考察したい。

一 『平家物語』の絵画化と作風

『平家物語』の絵画化はいつからか。作中人物が登場する作品であれば鎌倉時代に始まり、平清盛が活躍する「平治物語絵巻」が作られ、現存している。一方では小督と高倉天皇と隆房の恋物語を描いた「隆房卿艶詞絵巻」や、重盛や維盛、重衡ら平家の若者たちの華やかな宮廷での出来事を描いた「平家公達絵巻」のような白描の絵巻も現存している⁽³⁾。軍記絵巻として、集団行動する源平軍や、鎧兜に身を包んだ個々の武者が勇ましく表された前者と、平安王朝の恋物語としての側面である後者とは、顔貌の描き方から場面設定まで、全く異質な絵画表現となっている。

『平家物語』挿絵の確実な文献上の初出は、永享十年(一四三八)『看聞御記』の、後崇光院が内裏より借覧し詞書を源中納言らに読ませた「平家絵十巻」⁽⁶⁾で、引き続き南都喜多院の「平家八嶋絵」三巻や、内裏の『平家物語』四十帖、「平家絵扇流屏風」等、相次いで小画面連作

の『平家物語』絵と申しき記事がある⁽⁷⁾。ただしこれらが如何なる作風であったかは判らない。現存最古の「平家物語絵巻」は十六世紀の土佐光信工房作とされる、静嘉堂文庫美術館・個人・京都国立博物館に部分的に分蔵される白描「平家物語絵巻」である⁽⁸⁾。画面を見る限りでは、武者は軍記絵巻特有の表情とは異なるが、恋物語の絵巻ほど耽美的ではない。注目すべきは『平家物語』から派生した素朴な物語の絵本・絵巻類が作られ始めている⁽⁹⁾ことで、「横笛草子」のような恋愛と発心を主題としたもの、「義経東下り」「じざり弁慶」のような武者を主人公としたものと、分野は双方にわたる。

一方、『平家物語』中の特定の画面を抜き出した屏風絵で、構図の近似し定型化した作例が、桃山時代から江戸時代にかけて多く見られる^(註7参照)。「一の谷合戦図」「宇治川先陣争図」「平敦盛・熊谷直実図」「那須与一」など個々の場面を取り上げたもの、「一の谷・屋島合戦図」のように大画面に多くの名場面をちりばめたものなど武者絵的な合戦屏風の一方、「大原御幸図」のような叙情的な主題と描写のものもある。

近世の絵入り『平家物語』で注目されるのは、大名家旧蔵本が多いことである。福井藩主松平家に伝来した林原美術館本の考察では、『時慶卿記』寛永九年条の「平家物語絵詞」が東福門院和子の出産の翌日から読み聞かせられた記事から、「かような事情を背景として、江戸初期から中期にかけて、将軍家や大大名が、浩瀚な『平家物語』の絵巻づくりを企画したとしても不思議ではない」とされる^(註6参照)。また真田宝物館本は真田家の、熊本大学北岡文庫本も細川家の所蔵であったとい^(註5出口解説参照)、大名家の嫁入り道具として製作された可能性が示唆されていることは、明星本の成立を考える上で興味深い。

二 『平家物語』絵本・絵巻諸本の場面对照表』について

『平家物語』絵本・絵巻諸本の場面对照表』には、明星本と比較的時代が近いと思われる江戸時代前期の『平家物語』絵巻・絵本のうち、完本で全図版が公開されている作例として、林原美術館本と真田宝物館本を選んだ。林原美術館本の図版と場面解釈には、小松茂美編の中央公論社版を、真田宝物館本では、郷土研究誌『長野』に連載された小林一郎・小林玲子「絵で読む『平家物語』」の図版写真と解説を参考とした。これらと同じか先立つ時代の版本として、上方で刊行された明暦二年(一六五六)版の挿絵を加えた。『平家物語』最初の絵入り版本であり、出口久徳によって以後の絵入り版本に影響を与えたこと、チェスタービーター図書館本や真田宝物館本などの挿絵入り写本への影響が指摘されるものである。明暦二年版本の図版は福井市立図書館松平文庫本を用い、書誌以下は出口の「明暦二年版『平家物語』の挿絵をめぐって」^(註13)「絵入り版本『平家物語』考―挿絵の中の義経・弁慶の物語について」^(註14)を参考とした。

各本の場面選択以外で注目したのは、一画面中に「異時同図」のような複数の時制、あるいは霞や山で区切られた複数の時間や場所が描かれているか否かであり、複数の場合はその総場面数を洋数字で付加した。また、明星本の絵は総て見開きの二頁に亙るが、真田本は見開きと半丁分(片頁)のものとがあり、明暦二年本は、中央で折られた一丁分の表裏が一続きの絵のものと、別場面の二図(片頁ずつ二図)のものがある^(註15)ので、片頁のものに*印を付けた。

さらに錯簡の有無も記した。林原本巻十二に錯簡があることは、すで

に小松が指摘している(註6参照)。今回用いた明暦二年版本の松平文庫本にも巻一・三・七・十・十一・十二に、錯簡と思しきものがあり、該当箇所を捜すこととなった。巻十一の「遠矢」の船戦の箇所陸上で弓を射合う両群は、錯簡か絵師の間違いか不明だが、これ以外の該当箇所はカッコ内に正当と思われる章名と丸囲いの洋数字で示した。

この【表】でまず目に付くのは、林原本の七〇五画面、他本の約三倍という、画面数の圧倒的な多さである。平家物語十二巻の各巻をさらに三巻ずつに分けた構成であるためか、場面選択の偏りはほとんどない。さらにその約半数が一画面に複数の場面を霞等で区切って描くので、総画面数は膨大となる。

しかしその林原本でも、総ての場面を網羅してはいない。例えば巻六「紅葉」で、高倉天皇の愛した紅葉の葉を焚火にして酒を飲んでしまう下部たちの場面は、図柄も美しいので明星本や明暦二年本で取り上げられているが、林原本にはない。他の三本の画面数は、明暦本の一八四丁から真田本の二五三面まで比較的近いが、敦盛最期や那須与一のような名場面以外では選択場面に相違があり、明暦本と図様の近似が指摘される真田本(註13参照)ですら、例えば巻一の挿絵のうち同一内容が選択された例は約半数にすぎない。

さらに、真田本にある巻一「清水炎上」の高倉天皇の即位式や、明星本巻九「一二之懸」の一番乗りを名乗り挙げる熊谷父子、明暦本巻十「滝口入道」に帰依する人々など、それぞれに他の三本にない場面がある。選ばれた箇所が完全には一致しないことから、これら各本の場面選択が、相互間の全面的な模倣や引用ではないことがわかる。

二 林原美術館本の特徴

そこで各本の挿絵を比較しつつ、その特徴を見てゆきたい。林原美術館本は、越前福井藩主松平家に伝来した(註6参照)。初巻の詞書の筆者青蓮院門跡が承応二年(一六五三)没の尊純法親王にあたるので、制作時期の下限はこの頃とされる。折紙の筆者目録に「絵 土佐助」とあるが、該当する絵師は土佐派には見出されず、「土佐派の典型的な画風ではなく、民間の工房にあった人と考えられる」という。

公家や女性の引目鉤鼻と武者の顔立ちとを描き分け、公家や女性の顔は顎が長く面長である。武者(図1)は目鼻立ちが大きく、目は上下の顎の線を描いて白目を表し、鼻は尖り気味で小鼻や鼻孔を描き、口は唇が厚いか、への字に結び、頬骨を強調したごつごつとした輪郭で、概ね面長に描かれ、鼻の輪郭が明確な真横向きの顔が多い。このような特徴は『平治物語絵巻』以来、『蒙古襲来絵詞』や『後三年合戦絵詞』など男絵系の合戦絵巻中に武者の顔貌として見られるもので、林原本もこの武者表現を受け継いだと思われる(註4参照)。



1 林原美術館本巻四「橋合戦」の武者の顔貌

面長で時に頬骨の強調された「豊頬長顎」とも見得る顔立ちと、手首足首のくびれた四肢、女性の長くうねる髪と後れ毛をやや執拗に描くこと、巻九「落足」第二段の「人馬の肉、山の如し」の散らばる人馬の屍骸を忠実に、斬られた首の断面まで

も表すような残酷な描写は、土佐派よりもかつてこの越前松平家の下で絵巻を制作した岩佐又兵衛派の影響を思わせる。

王朝風の直衣や女房装束、鎧兜や馬の描き方は手馴れている。一方で小紋の直垂や、水墨画の襖と青畳が敷き詰められた数奇屋風書院造の建築など、当世風の要素も混在することは、同時代の物語絵巻と共通する。絵具は上質で、特に巻一「我身栄華」の衣装などは絵具も濃く丁寧で、衣の輪郭や文様には金泥の細線が用いられる。霞は白群に金砂子が蒔かれ、背景は緑青の濃淡が使い分けられ、松枝も細やかに表現される。

画面には長短があり、巻一「我身栄華」のような数紙に及ぶ長大画面の一方で、半紙にも満たない場面もある。短い場面が続く絵にあわせて、一紙ずつに数行のみ書かれた詞書が存在することから、まず絵が先に描かれたと想像される。巻十二の数箇所の絵の錯簡は、絵と詞書を表具する時に起こったと考えられている。

また一場面に描かれる人物の多さも目立つ。例えば巻十一「弓流」の同場面では、明星本の十五名、明暦本と貞田本の各二四名に対し、林原本では六一名を数える。人物の大きさはいづれの本も六センチ前後とさほど変わらないが、林原本ではびっしり重なるように描かれる。

画面構成で特徴的なのは、一つの画面に数場面を描く例が多いことで、約半分の画面が該当する。ことに巻四では三五図と、巻全体の三分の二の画面において、霞や山並で区切って複数の異なる場面を描き込む。例えば巻三「有王島下」二段は、鬼界島に着いてから俊寛を捜して昼夜となく歩き、再会するまでの有王が、一面面を霞と山で区切った五箇所に描かれる。巻四「厳島御幸」五段の高倉上皇も、鳥羽殿への到着・後白河との出会い、語り合い・厳島への牛車・船と、一面面に五箇所、霞・樹木・館・土坡を駆使して細かく区切られた空間に表される。あまりに

細切れの慌しい画面は、再会のしみじみとした情感を感じさせる余裕を与えない。

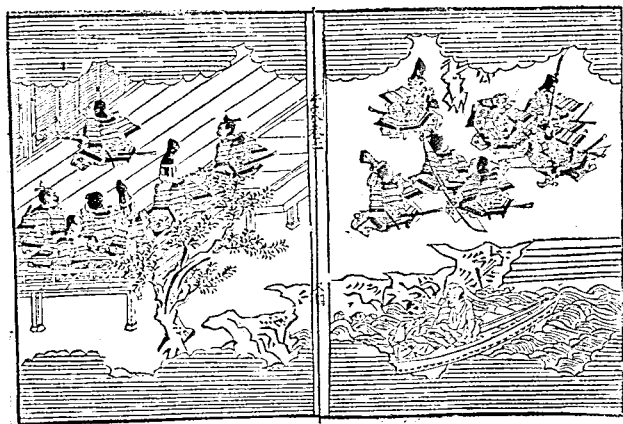
総じて、各画面ごとに完結した絵画または緩急自在な絵巻というよりも、『平家物語』の詞書の内容を逐語訳的に忠実に絵画化した印象が強い。

三 明暦二年版本について

明暦二年版本については、出口久徳の論文(註13・14参照)に詳しい。この版は、『平家物語』の最初の絵入り版本で、他の版に比べ挿絵数が特に多く、また寛文十二年版や写本のチヌスターピーター図書館本など、後代の『平家物語』挿絵本への影響が指摘されている。

挿絵の特徴として出口が挙げるのが、群像表現を用いた絵と、一丁分の表裏で続く図様が多いことである。巻七「木會願書」では、明暦本の表裏にまたがる一丁の図を開くと、義仲と願書を書く覚明の他にこれを囲んで見つめる総計二十三名の従者たちが描かれ、同場面を描いた版本『舞の本』の挿絵の二名、寛文十二年版『平家物語』の三名と比べ、際立って多い。ところが実際に本として綴じられた状態では、明暦本の図は中央から折られ、表裏に分かれてしまうので、裏側の頁では従者達の視線は義仲に届かず、群像表現の効果は発揮されていない。そこで出口はこの図様を、典拠とした先行作品に基づいたゆえと考ええる。

巻三「有王島下」の俊寛との再会の場面では、丁の表に立ちすくむ王と俊寛を、裏に有王の前に倒れる俊寛を描き、丁をめくると次の動きが見える表現を挙げ、先行作品の異時同図法を踏襲したことによった効果と解釈する。また巻五「奈良炎上」で平家軍と僧兵達の乱戦の図中に、



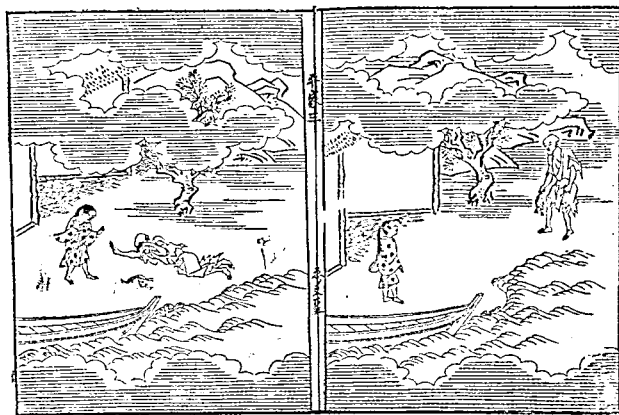
2 明暦版本巻七「竹生嶋詣」の丁の表と裏

明暦本が先行作品に拠ることは、構図の巻九「木會最期」のように、兼平の最期が前頁、義仲の死が後頁と、時制と逆になった見開きの図版に基づいたと思しき図からも裏付けられる。その典拠となった作品がどのような形態であったかを、先の【場面对照表】でさらに考察したい。

明暦本の挿絵の構図は、全体が同質というわけではない。巻一・巻二のほぼ総てが「木會願書」のような丁の表裏に互る図様である

東大寺炎上の張本人とされる重衡と判別できる姿がないことを挙げ、「先行する合戦絵のある部分を切り取ってきたという印象を受ける」という。

明暦本の先行作品として、出口は「群像表現、異時同図法、中世合戦絵的な絵など」の要素から版本ではないとし、伝土佐光信筆の白描絵巻のような絵巻形態のものを想定する。その一方、一の谷合戦屏風と明暦本巻九「坂落」がともに、坂を下ろうとする義経勢と同時に、奇襲に気が付いていない平家の陣内を描くことを指摘し、「絵の発想、人物の配置、描き方などが極めて似通っている」という。



3 明暦版本巻三「有王島下」の丁の表と裏

この絵師自身の工夫かと思われるものに陣幕の紋がある。源平の紅白の旗は、着色画ならば一目で区別が付くが、単色の版本では識別できない。そこで平家の陣幕には蝶紋、源氏には笹（笹竜胆か）が描かれる。これは明暦本巻五「富士川」以降に見られ、巻四「橋合戦」にはない。単色の版本や白描絵巻に拠ったのであれば、最初から識別のための紋所を写したであろう。彩色本を典拠としていたこの絵師が、単色の版

のに対し、巻三以降巻六までは、「建礼門院の安産祈願」と「赦免状を下す清盛」のごとく、多くが丁の表裏で場所や時制が異なり【表】では*印）図様は繋がらない。絵師が違うのか、丁の中央で図様が切れることに気付いたのか、巻七「竹生嶋詣」(図2)の如く当初は一続きであった図柄も、半分は船着場に、半分は竹生嶋社の縁先にと別画面になるように手を加えている。典拠本の「異時同図法」のなせる業と見られた巻三「有王島下」の俊寛との再会場面(図3)は、二図とも同じ家と木の背景なので、版本の絵師が意図的に、丁の表裏で俊寛の時制を変えて二図にしたものと思われる。

本での源平の識別し難さに気付き、巻五から付加したものではないだろうか。

一方、「坂落」の一の谷合戦の構図からは、典拠となった絵の形態が想像される。坂上の源氏と坂下の平家の陣屋の様子を同時に描く構図は、上下の空間が必要とされる。縦幅の狭い横長の絵巻では、下方の平家陣まで描き込むのは難しく、林原本のように改めて別場面として描く他はない。しかし屏風のような大画面であれば源平を上下に描くことは容易で、効果的ですらある。明暦本が典拠とした先行作品は、必ずしも白描絵巻のみとは限らない。絵巻にしては群像場面の人数が多く、華やかであることも含めて、屏風絵に拠った箇所も少なくないと思われる。

四 真田宝物館本について

真田宝物館本は、挿図二五三枚（註11参照）を貼り込んだ三十巻本で、真田家に伝来し加賀大聖寺藩出身の五代藩主真田信安夫人の嫁入り本かとされる²²。挿絵は見開きと半丁とが混在する。水波や豊、着衣などの彩色は濃く、比較的原色を多く使う。霞には金砂子を蒔き、衣文線や女房装束の文様、鎧兜の金具には金泥が使われている。貴族の顔は白塗りで面長の引目鉤鼻、武者は白塗りと肌色を使い分け、鼻がやや大きく描かれるが両者の差は極端ではない。弁慶の顔のみは、灰色で一回り大きく描かれるのが目立つ。真横顔が比較的多く、奈良絵本にしばしば見られる頬のふくらみを表す線が入る。

真田本挿絵には明暦本と近似する図様の画面の多いことが、巻一「妓王」の、三人の庵を訪ねる出家姿の仏御前の図版を通して、出口により指摘されている²⁴。しかし両者の場面選択は必ずしも一致するわけではない。

い。例えば巻六「紅葉」から「小督」に互る高倉天皇の物語は、明暦本では六場面、真田本で五場面にわたって描かれる見所であるが、同一の時点が選ばれたのは天皇の文を見る葵前と、小督を探し当てる仲国の二箇所のみに過ぎない。

さらに、四本の中でも真田本以外に見られない図様もある。例えば巻九「浜戦」の知盛が乗って来た黒馬を帰す場面で、他の三本が海中で知盛を振り返る馬を描くのに対し、真田本のみは陸に上がってから沖の知盛に向かって嘶く馬の姿を描く。明暦本と真田本の選択場面や図様は、似たものが多いとはいえず、完全に重なるわけでも一致するわけでもない。両者は直接的な影響関係にあるというよりも、合戦絵巻や合戦屏風を通じて培われ定型化されつつあった平家物語の数多くの図様の内から、それぞれが引用したゆえの近似ではないだろうか。

また真田本には、八巻「猫間」の段の挿絵が全くない。他本ではいざずれも猫間中納言に田舎風の食事を出して辟易させる木會義仲と、牛車の乗り方を知らずに暴走させてしまう義仲の挿絵がある。これらは木會義仲の都での田舎者ぶりを描いた段であり、都の者には面白くとも、木會と地理的に近い真田家にとっては不快な内容であろう。同じく「鼓判官」で、身の程知らずの義仲が公卿の知康を怒らしてしまう箇所の挿絵がないことも含め、真田本の地方性を思わせる箇所である。

五 明星大学図書館本の特徴

明星大学本の挿絵は二二三面、すべて見開きの形で冊子体の本文に貼り込まれ、錯簡はない。絵具は上質で、褪色は見られない。桃色や水色などの中間色を交え、水波や土坡の絵具をばかす。戦闘場面でも人数は

比較的少なく、背景はあっさりと余白を多く取って描くので、全体的には淡白な印象である。しかし法皇や宮中の女房達の着衣には細い金泥の線や衣文線や文様が描かれ、武者の鎧兜の金具にも金泥が用いられる。刀や薙刀などの刃物に銀は使われず、灰青の絵具に青が塗り重ねられる。黒い直衣に織り出された立涌などの有職文様や烏帽子、鎧の黒金具には、膠分の濃い艶のある墨が上から塗られ、襖絵や出産の白絵屏風には光沢を持つ雲母が刷かれるなど、光線の加減でしか見えない箇所まで筆が重ねられている。

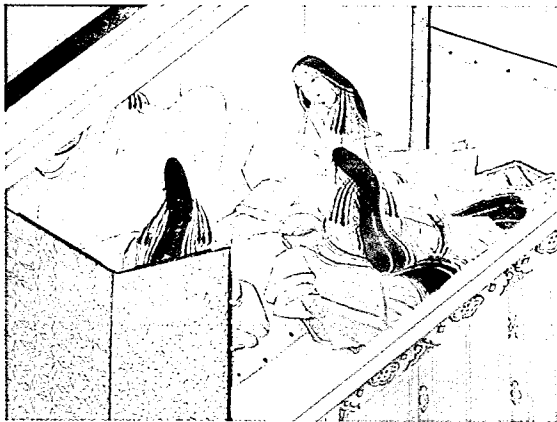
絵の上下には総て、柔らかな輪郭線の霞が棚引く。霞は淡灰色の上に金砂子が極めて濃く時かれる。地面にも部分的に金泥が刷かれ、余白の多い空間の調子が整えられている。詞書の料紙にも、下絵として金泥で霞の間に小さ目の草花や水草、風景等が繊細に描かれ、各冊の表紙見返しには一面に金箔が貼られている。上質の素材と金の多用、細やかで手の込んだ仕事、ほとんど開かれたことのないような保存の良さ、傷みのない専用の蒔絵箱などからは、林原本や真田本と同様に、大名家の嫁入り道具のような制作事情が想像される。

描写はきわめて丁寧で、直衣や女房装束、鎧兜、特に馬の形状は手馴れている。敦盛の萌黄や直実の赤皮絨など、鎧の配色も本文にかなり忠実である。義経の「赤地錦の直垂に紫裾濃の鎧」を再現するため直垂にはそれらしき模様を加え、鎧には色の出にくい紫をあえて用い、弁慶の直垂には仏教色の強い輪宝模様を描く。南都牒状などの僧侶たちには、墨染よりも濃淡の柿色に金泥で模様を入れた衣の者を多く描くので、寺中であつても華やかな色彩となる。

卷三「御産巻」の中宮の産室（図4）では、本文に記述がない白絵の屏風や侍女たちまでも白一色で描えた装束などを、有職故実に従って

白・銀・雲母を駆使して描く。建築物は丁寧な屋台引きの細線で描かれ、板や柱ごとにぼかしが入れられて立体感が出される。もっとも襖絵には水墨画が描かれ、床には畳が敷き詰められた当世風の数奇屋風書院造に描かれるところは、林原本や真田本と同様である。風景は大和絵の穏やかな土坡と松が多用され、俱利伽羅谷や一の谷のような山崖は迫力が無い。敵島神社や富士山は比較的现实に近いものの、高野山や那智滝などは全くかけ離れて類型的に描かれる。

男女の貴族の顔貌は、白塗りのやや長めの顔に、点状の瞳に極細の上瞼の線を添えた目に鉤鼻と、赤い小さな点の口を描き、頬には淡朱をぼかす。武者は白塗りと肌色の者が混在し、瞳を挟んで上下の瞼の線を細く入れる。鼻はし字状の鉤



4 明星本卷三「御産巻」の中宮の産室

鼻、口は赤い小点で、小さな口髭か薄墨で口の回りをぼかす場合もあるが、貴族の顔立ちと大差ない。真田本では顔色を灰色にするなど他本では際立って恐ろしいに表される弁慶ですら明るい肌色でおちよぼ口の童顔（図5）である。兜の中の顔も丸い輪郭線で括られ、真横顔はきわめて少ない。²⁶林原本など合戦絵巻の武者の顔に見られるような、兜の目庇ぎりぎりに見開いた



5 明星本巻十一「壇浦合戦」の弁慶の顔貌

目と大振りな鼻と厚い唇や、への字口、頬骨の出たごつごつした輪郭線の武者らしい顔貌表現（註4参照）は行われない。水夫達など庶民も、体は手首足首が多少くびれた筋肉質であるが、顔立ちは卑しくなく、さほど貴人との差は見られない。

複数の時点を一図に描くことは珍しく、一画面に同一人物を複数回描く例は巻二「少将乞請」の、教盛邸で使者を命じられる季貞と清盛邸で口上を言う季貞の一箇所のみである。また一人の人物の周囲に異なる時制の出来事を描く例は、巻四「鶴」で怪しい黒雲が御殿の上に棚引いた時点と、頭は猿、胴は狸、尾は蛇で鳴声が鶴に似た怪物が仕留められる二時点と、巻五「文覚被流」で文覚を中心に、まず資行が烏帽子を打落とされた事、刀を抜いた文覚に武者所の右宗が対向する所、その後ようやく寄って来た人々の三時点を描く、二箇所である。

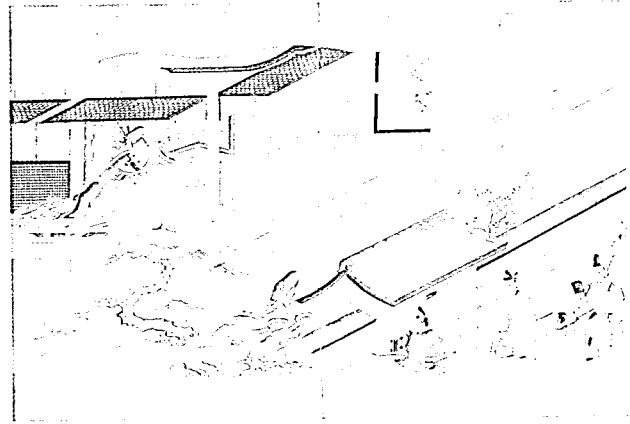
場面選択では、一の谷と屋島の合戦を含む巻九が三九図と他の約二倍あり、「一二之懸」が多く描かれている以外は、ほぼ均等である。「足

摺」の俊寛が、尻餅をつく他本と違ってうつ伏せに描かれるのは、本文の「渚にあまりたをれふし」の忠実な絵画化であろう。しかし他の名場面、「橋合戦」の淨妙坊や「坂落」の「敦盛最期」、「那須与一」等は、屏風絵や他本の構図と近似した定型化された図様である。また異国の絵が少ないことも指摘できる。『平家物語』に含まれる挿話のうち「頼家」「名虎」など日本の場面はあるが、他本に見える「蘇武」など中国の故事、「慈心房」の閻魔王宮の挿絵はない。ただし唯一描かれる「咸陽宮」の秦始皇帝宮の異国表現は、服装、建築、文様、庭の岩組に至るまで手馴れたもので、同時代の他の作例に劣らないだけに、なぜ描かなかったか理解に苦しむ。

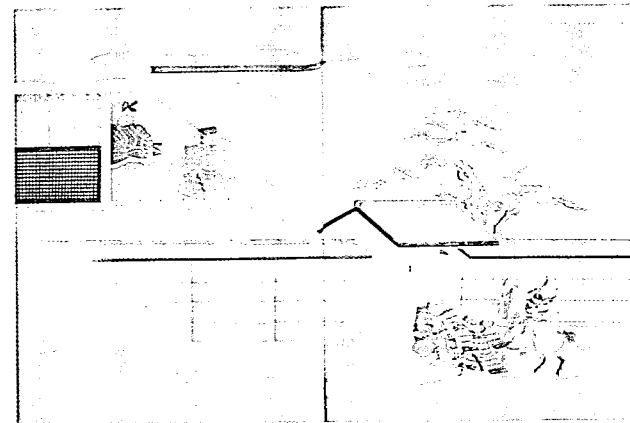
【場面比較表】で特記すべきは、明星本で死や残酷な場面が回避されていることである。例えば巻九「小宰相」では他三本が入水した小宰相の死体を描くのに対し、明星本は入水直前の合掌する姿しかない。『平家物語』の頂点とも言うべき巻十一「先帝御入水」の、二位の尼が安徳天皇と入水しようとする場面も他の三本にあるが明星本にはなく、入水しても引上げられて生き残る建礼門院と泳ぐ宗盛父子の場面のみを描く。その宗盛父子の斬首の場面も巻十一「大臣殿誅罰」の他の三本には見えないが、明星本にはない。もっとも黒髪に染めた実盛の首や、斬首の場で乳母と引き離される副将など、全く描かれないわけではない。それでも極力、血や討たれた死体よりは生前の場面が選ばれ、林原本のように切り離された首やその断面、流れ出た血までを執拗に描くことはしない。このような残酷場面を回避する傾向や、弁慶のような荒武者すら顔貌を恐ろしげに描かない明星本ゆえ、合戦場面は林原本等他の挿絵に比べて迫力を欠く。すまし顔で刀を振り上げたのみで斬られもせず血の流れない画面（図6）は、人形の戦争のようには見えぬ。軍記としての



6 明星本卷四「橋合戦」の浄妙坊と一来法師



7 明星本卷五「月見」旧都の大宮御所を訪れる徳大寺実定



8 明星本卷七「忠度都落」俊成に和歌を差し出す忠度

『平家物語』の挿絵としては、他本に劣る重大な欠陥と言わざるを得ない。

しかし『平家物語』はまた、平氏という貴族の物語でもあり、古くは「平家公達絵巻」や、後には「横笛草子」・「妓王」のような御伽草子絵を派生し、「大原御幸」屏風のような、恋や発心にまつわる絵画の主題ともされてきた。明星本の挿絵は、この優雅な『平家物語』の系統に位置づけ得る。軍記物語としては冗漫な箇所となりがちな巻五「月見」の徳大寺実定が旧都の大宮御所を訪れる場面(図7)や、巻六「小将」の段など王朝風の場面は極めて収まりがよい。さらに雅な心を持ちつつも

戦場に赴かねばならない鎧姿の平家の公達、例えば巻七「竹生鳥詣」の弁財天の社前で琵琶を弾く経正や、「忠度都落」の俊成に和歌を差し出す忠度(図8)などには、華麗な甲冑の描写も巧みなこの絵師ならではの情緒が漂う。

結 『平家物語』挿絵の源泉

本論では江戸時代の『平家物語』挿絵を、林原本・明暦版本・真田本・明星本の比較をしつつ考察した。その結果として諸本の間にある絵

画表現の差異―軍記絵巻としての傾向が強い林原本、合戦屏風からの引用も含む明暦本、明暦本と近似する図様も含むが必ずしも一致はしない真田本、合戦絵というよりも宮廷文化的な表現傾向を持つ明星本―を見た。これらの相違は何に基づくのか、軍記物語性と王朝的な耽美性のよ
うな、『平家物語』自体の持つ複数の側面に由来することは先に論じた。

しかし『平家物語』以外にも、そこから派生した様々な物語や絵画の影響がある。出口は明暦本の義経主従の扱いについて、『平家物語』本文に書かれる以上に義経の登場場面が多く、『平家物語』では七箇所に名が載る程度に過ぎない弁慶が、三草勢揃以降は必ず義経の側に描かれることを指摘する(註14参照)。実際、明暦本には弁慶の登場する図が十六箇所あり、同様のことが他の三本にも云える。巻九「三草勢揃」から巻十二「判官都落」まで、林原本では二八箇所、真田本では判別できるもののみで十三箇所、明星本では巻十一までで十二箇所と、ほぼ総ての場面で義経の側に七つ道具を背負った弁慶が描かれている。版本か写本かを問わず、近世の『平家物語』挿絵全体に共通する特徴であろう。

その七つ道具が義経主従の典故を推測させる。弁慶は場面によって袈裟頭巾・鉢巻・揉烏帽子・兜と様々な姿であるが、七つ道具は他の僧兵から弁慶を際立たせる目印として、どの本の挿絵にも描かれる。しかし『平家物語』自体には七つ道具の記述はない。『平家物語』から派生した、義経や弁慶を主人公とする様々な幸若舞曲や御伽草子等によって、絵師と観者が共有する常識となっていたゆえに、七つ道具が挿絵に描かれたのである。

また諸版本について出口は、巻十一前半部で平家に比べ義経軍の場面が多く絵画化されていると指摘する(註14参照)。語呂合わせに過ぎない「勝浦合戦」や使者を縛る「大坂越」のような、挿絵にするほど価値

のない源氏の場面がある反面、この間の平家はほとんど描かれないう。写本挿絵も対照表で見ると同様に「勝浦合戦」や「大坂越」を含み、平家側はない。しかしこれは単なる源氏好み、判官忠貞のためとは限らなからう。例えば一の谷と屋島を対とする合戦屏風では、一の谷屏風の鴨越の山々に対応するように屋島屏風にも山岳が描かれ、その点景として大坂越えする義経一行の姿が必要とされる場合がある。些少な挿話の場面は、このような屏風の一部を用いたことに因るのではないか。

逆に、平家側ばかりが選択された箇所もある。例えば巻七「忠度都落」「経正都落」、巻十の「千手」「横笛」等は、『平家物語』の大筋に無関係な出来事であるが、どの本の挿絵にも、これらの場面が選択されている。忠度と経正、千手が選ばれたのは、謡曲の「忠度」や「経正」「千手」などに、横笛は「滝口入道縁起」や「横笛草子」などの御伽草子によって親しまれていたためであろうことは、義経主従の場面が多いことと同様に考えられる。

これら『平家物語』諸本挿絵の場面選択や、個々の場面の構図の多様さは、中世の数々の『平家物語』絵巻や合戦屏風、絵本類を受け継いだのみならず、この物語から派生した幸若舞曲・謡曲・御伽草子などの文学や演劇作品が反映された結果である。その背後に広がる中世文化の多彩さには、圧倒されるばかりである。

本論は、平成十九・二〇年度科学研究費補助金・基盤研究(〇)19920114「物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化」(代表研究者)および明星大学平成二十年度特別研究費(共同研究助成費)「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究」(研究分担者)の成果の一部である。

註

- (1) 書誌については、柴田雅生「明星大学所蔵絵本・絵巻―解題とその言語的特徴―」(仮題)『物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化』(平成十九年・二十年度科学研究費報告書)平成二十一年掲載予定・本データベース 柴田雅生分担「明星大学所蔵『平家物語』絵本について」、参照
- (2) <http://hon.eimkui.netsai.ac.jp/> 参照
- (3) 武田恒夫・尾崎元春・前田誠子「源平の美術(絵画)」『別冊太陽』十三「平家物語絵巻」昭和五〇年
- (4) 山本陽子「小画面説話画における武者の顔貌表現について」『明星大学研究紀要』[造形芸術学部・造形芸術学科]第十七号 平成二十一年(掲載予定)
- (5) 鎌倉末ごろの『入木口伝抄』には、比叡山で制作された「平家物語絵巻」が存在していたと解しうる記事があるという。(出口良徳「平家物語絵巻めぐって」『平家物語を知る事典』東京堂出版 平成十七年)
- (6) 小松茂美「林原美術館本『平家物語絵巻』のすべて」『平家物語絵巻』巻第十二 二〇六―二四三頁 中央公論社 平成四年
- (7) 相澤正彦「平家物語と絵画」『平家物語の世界展』図録 平成五年
- (8) 玉蟲敏子「作品解説三八」『室町の絵画展―詩画軸・屏風・障壁画―』葎嘉堂文庫美術館 平成八年
- (9) 酒巻智子「源平の美学―『平家物語』の時代」『源平の美学―『平家物語』の時代』一〇―一二頁 サントリー美術館 平成十四年
- (10) 小松茂美編『平家物語絵巻』巻第一―十二 中央公論社 平成二年―四年
- (11) 小林一郎・小林玲子「絵で読む『平家物語』」一―二七 『長野』一九三―二〇〇号 平成九年―平成十三年
- (12) 国文学研究資料館のマイクロ資料による
- (13) 出口久徳「明暦二年版『平家物語』の挿絵をめぐって」『立教大学日本文学』八一号 十四―二八頁 平成十年
- (14) 出口久徳「絵入り版本『平家物語』考―挿絵の中の義経・弁慶の物語について―」『学芸国語国文学』二九号 一―十六頁 平成九年
- (15) 一丁に二図あるものも含むので場面数は倍近くなる。
- (16) 明星本の挿絵画面は現状で二三面であるが、巻一と巻十二を欠くため、絵場面数は不明である。
- (17) 「作品解説解説三」『平家物語と絵画―『平家物語の世界展』図録 平成五年
- (18) 赤澤真理「江戸前期における寝殿造りへの憧憬と理解―住吉派物語絵にみる住宅観

―『講座源氏物語研究』第十巻「源氏物語と美術の世界」二三四―二六五頁 平成二〇年

- (19) 市古夏生は丁付や柱刻から、本文のみで版行された本に、後からこれらの挿絵が読えられ、補入されたと推理する(市古夏生「絵入り本の流行」『近世初期文学と出版文化』若草書房、平成一〇年)。本書の錯簡の多さは、この事情に因るものであろう。
- (20) 巻七「北国下向」の琵琶を弾く経正なども、竹生鳥社殿の縁側を切って、表裏で境内と外の風景に分けている。
- (21) 巻七「木曾願文」の従者は画面の小さい絵巻や絵本では、林原本で十三名、明星本四名、真田本九名と、明暦本の二十三名ほど多くは描かれていない。
- (22) 『長野』第一八七号 平成八年 口絵解説
- (23) 巻九「弓流」の二四名中、後ろ向きは四名、斜め前向きが十二名、真横向きは八名である。
- (24) 出口久徳「軍記物語の挿絵と読み―『平家物語』の絵入り版本を中心に―」『軍記と語り物』第三九号 平成十五年・出口久徳「絵画化された『平家物語』真田宝物館『平家物語』解説」『図説 平家物語』河出書房新社 平成十六年
- (25) 例えば京都市立芸術大学芸術資料館には土佐派に伝来した、各本とも全く異なる平家物語絵巻の部分的な粉本がある(京都市立芸術大学芸術資料館編『土佐派絵画資料目録』(六) 平成八年)。
- (26) 例えば林原本「弓流」では全六一名中、いわゆる七・三の角度の斜前向きが二一名、後向きが十四名、真横向きが二六名と、真横向きは斜向きと同数かそれ以上に多いのに対し、明星本「弓流」では全十五名中、斜前向きが十一名、後向きが三名で、真横向きは一名と少ない(註4参照)。
- (27) 藤原成一「影薄い弁慶―『平家物語』の世界―」『弁慶』九―十五頁 法蔵館 平成十四年、参照
- (28) 七つ道具は室町末期には絵画にも描かれ「比較的はやくからの常套手段であった」という。(徳田和夫「弁慶」項目解説『歴史学辞典 三 かたちとしるし』弘文堂 平成七年)

内容末尾の洋数字は一段中にある異時間図の場面数 *は片頁のみ ○囲いの数字は錯簡の本来の章の林原本での段数

統一 巻段	林原要術館蔵 絵巻	明和二年 版本	真田室物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本(統一なし)
祇園精舎				
段上開封	節会に参内した忠盛と庭の家貞4 鳥羽上皇に頼明する忠盛 2	節会に参内した忠盛と庭の家貞	節会に参内した忠盛と庭の家貞 鳥羽上皇に頼明する忠盛 *	
註	仙洞御所で秋を詠む忠盛 扇を見つけられて秋を詠む女房 熊野詣の舟で舟の言兆を得る清盛			
秀盛	出奔する清盛 市中を息回る六波羅の秀盛			
我身榮華 妓王	清盛殿のにぎわい(表大画面) 妓王前で舞を受け取る刀自 仏御前を追い返す清盛 2 清盛に頼明する妓王 2 仏御前の舞を見る清盛と妓王 2 妓王に問を出す清盛 2 清盛邸を出る妓王 2 悲嘆に沈む妓王一家 人々から文を受け取る妓王 2 清盛から呼出を受ける妓王 3 仏御前の前で舞う妓王 2 泣き沈む妓王一家 娘の庵の尼家の妓王一家 妓王の庵を訪れる尼家の仏御前 ともに念仏する妓王一家と仏御前	清盛邸のにぎわい 清盛邸のにぎわい 若者一行と牛車(段下集合②か)	清盛邸のにぎわい 清盛邸のにぎわい 若者一行と牛車(段下集合②か) 若者の庵を訪れる尼家の仏御前 *	
二代后	二条天皇の胎室を受取る大宮 入内の旨を下す二条天皇 2 大宮を説得する父の右大臣 2 泣く車に乗る大宮 祈禱殿の二条天皇と大宮	泣く車に乗る大宮		
頼打控	二条天皇の舞殿と頼朝の寓中 2 頼朝で延暦寺の轡を逮す奥福寺僧 比叡山を駆け下る延暦寺の僧兵達 坊を聞いて内裏に集まる平家勢 清盛邸へ舞踏する後白河法皇 3 延暦寺僧に焼封される清水寺 2 後白河上皇の遠御 2 上皇に本音を語らす西光	三人の尼と一人の尼(妓王御前) 頼朝で延暦寺の轡を逮す奥福寺僧		
清水炎上				
段下集合	新帝喬叅天皇の御所 御所に集める清盛 清盛主従を際らしめる基房の下部 資盛の訴えに怒る清盛 2 基房一行を辱める資盛の下部たち 母音を奪く基房 清盛を叱責する重盛			
鹿谷	喬叅天皇の御所行幸 2 山姥の要術を報告する後枝 3 成親が上賀茂社の夢を受け取る 上賀茂社の神木への奉告 鹿谷の宴会で孩子を倒す成親 2 多田行綱を呼び寄せた成親 加賀国目代と清泉寺僧侶との乱闘 清泉寺を焼く軍人たち 目代の館を攻める白山の神人衆徒 白山の神人達が比叡山に訴える 朝廷に訴える比叡山の大夫たち 比叡山勢に矢を射かける頼朝勢 比叡山の僧たちを追い返す武士達 関白を説く比叡山の僧侶達 関白御突き立つ様子の様	三人の尼と一人の尼(妓王御前) 頼朝で延暦寺の轡を逮す奥福寺僧		
頼川合戦				
頼立				
御奥撰				
内裏炎上				
頼二 巻段	林原要術館蔵 絵巻	明和二年 版本	真田室物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
源主流	明家の罪を誅す公卿達 2 明家と滯り立ての武士達 西光父子を保護する大泉 流される途中の明家 2 比叡山の衆徒が控護 2 明家墓道に向う大泉 比叡山に集った明家 3 九曜の形を見る一行回廊型 法皇に奏上する西光 清盛に密告する行綱 2 資成の復命を聞く清盛 清盛邸で捕まる成親 2 西光が清盛に言い返す 4 引き控えられる成親 2 成親の命乞をする重盛 4 嘆く成親の家族 2 法皇に別れを告げる成親 3 教盛と対面する成親 2 教盛から清盛への使者となる季貞 2 教盛の屋敷に戻る成親 2 法皇に抗し武裝する清盛 前庭に寝られる清盛 4	公卿達と源主明家 * 明家の罪を誅す公卿達 * 流される途中の明家 * 比叡山の衆徒が控護 * 比叡山に集る奥の明家 * 比叡山に集る奥の明家 * 九曜の形を見る一行回廊型 * 清盛邸で捕まる成親 成親の命乞をする重盛 法皇の御前に別れを告げる成親 * 清盛と家臣(清盛に伝える季貞か) 清盛と武裝した兵士たちと公卿	公卿達と源主明家 * 公卿達と源主明家 * 流される途中の明家 * 比叡山の衆徒が控護 * 比叡山に集った明家 * 九曜の形を見る一行回廊型 * 清盛邸で捕まる成親 西光が清盛に言い返す * 引き控えられる成親 成親の命乞をする重盛 * 法皇の御前に別れを告げる成親 * 清盛と家臣(清盛に伝える季貞か) 清盛と武裝した兵士たちと公卿	明家の罪を誅す公卿達 明家の罪を誅す公卿達 流される途中の明家 比叡山の衆徒が控護 明家に奥を勤める坊友 明家に奥を勤める坊友 清盛邸で捕まる成親 西光が清盛に言い返す 引き控えられる成親 成親の命乞をする重盛 成親の命乞をする重盛 成親の命乞をする重盛 法皇の御前に別れを告げる成親 * 季貞に使者を命じる教盛 2 教盛の屋敷に戻る成親 * 法皇に抗し武裝する清盛 * 前庭に寝られる清盛

巻七 巻段	林原義術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
山門返状	山門は義仲に和政の返状をする 山門の返状を返す	送ける前達と和政を囲む僧侶送	山門は義仲に和政の返状をする*	山門は義仲に和政の返状をする
平家山門運書	平家も山門に運書で願書を出す 日吉社に平家の願書を出す願書			平家から願書を受け取る願書
主上初逢	源氏に佐え御遣りする平家の人々 義仲を迎え討つため集まる平家 建礼門院に都落ちを進言する宗盛 後白河法皇の行方を探る宗盛2 出発する安徳天皇2		平家の願書を送る山門の僧侶送*	
桂盛初逢	都落ちの列から抜ける匡原基通 家族に連れられ出発しかねる桂盛2 遅れた桂盛に催促する平兵 桂盛に追いすがる齋藤兄弟	家族に連れられ出発しかねる桂盛* 遅れた桂盛に催促する平兵*	遅れた桂盛に催促する平兵	遅れた桂盛に催促する平兵
聖主初逢	平家に焼き払われる京の家々 關東武者の命乞いをする宗盛2	聖状の作成*(木曾山門返状(1)か) 届ける節*(山門返状(1)か)	關東武者の命乞いをする宗盛*	
忠度初逢	源原俊成に和政を差し出す忠度2	源原俊成に和政を差し出す忠度	源原俊成に和政を差し出す忠度*	源原俊成に和政を差し出す忠度
経正初逢	経正は法親王に拜啓を返す 経正を見送る法親王 2	経正は法親王に拜啓を返す	経正は法親王に拜啓を返す*	経正は法親王に拜啓を返す
青山之沙汰	宇佐八幡で名譽山を拜く経正 村上天皇に秘曲を授ける原承武	村上天皇に秘曲を授ける原承武*	村上天皇に秘曲を授ける原承武*	
一門初逢	一行から途中で引き返す頼盛2 常盤殿に命乞いする頼盛 平家の一行に追いつく桂盛兄弟 宗盛に進言する貞能	都落ちする一門* 平家の一行に追いつく桂盛兄弟か*	都落ちする一門	一行から途中で引き返す頼盛
福原初逢	重盛の墓前で嘆く貞能 2 宗盛に忠誠を誓う平家の人々 福原の御所を兵衛する人々 福原に火を放ち粉を出す平家一門		重盛の墓前で嘆く貞能*	福原から粉を出す平家一門

巻八 巻段	林原義術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
山門初逢	後白河法皇は比叡山に遊れる3 比叡山に詰めかけた兵隊送			
		守護する源氏の一門*		
		比叡山から遠御する後白河法皇*	比叡山から遠御する後白河法皇*	比叡山から遠御する後白河法皇
	展って義仲らに陣営を下す法皇 法皇に依く第四皇子 2 頼朝の即位を沙汰する後白河法皇 宗盛寺に修しし秋を休む平家 2		法皇に依く第四皇子*	法皇に依く第四皇子
名虎	源位継承の相謀を尋ねる公伝達 源位継承の相謀の龍虎と名虎 龍虎の祈りにて勝利する龍虎 2	源位継承の相謀の龍虎と名虎	源位継承の相謀を尋ねる公伝達 源位継承の相謀の龍虎と名虎	源位継承の相謀を尋ねる公伝達 源位継承の相謀の龍虎と名虎
宇佐行幸	第四皇子の即位を聞く平家一門 筑紫の御所 2 宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門	宇佐八幡へ行幸した平家一門 大宰府に戻った安徳天皇*	宇佐八幡へ行幸した平家一門
経正	名月に都をしのぶ平家一門 2 平家通い出し下知される経正 経正の祖先の女と相手の男 3 正体を現す大蛇と経正の祖先の女 女と大蛇の間に生まれた軒太	正体を現す大蛇と経正の祖先の女		正体を現す大蛇と経正の祖先の女
大宰府初逢	説得に来た経正を追い返す経正 使者桂村に説き聞かせる時宗 経正方を攻める平家軍 雨中、大宰府を落ち行く平家一門 平家を迎え入れる兵衛次宗送 流刑う平家の粉から入水する流刑 原島津で暮らす平家一門 2	大宰府を落ち行く平家一門	大宰府を落ち行く平家一門	雨中、大宰府を落ち行く平家一門
征夷將軍院宣	院宣を受け取る三浦義隆 引き出物を受け取る康定 2 康定に對面する頼朝 引き出物を受け取る康定 2	康定に對面する頼朝	院宣を受け取る三浦義隆 康定に對面する頼朝	院宣を受け取る三浦義隆 康定に對面する頼朝
猫間	法皇に報告する康定 義仲に食事を出される猫間中納言 義仲の牛車と道う平兵	義仲と猫間中納言* 牛車と鞍馬の一行*		義仲に食事を出される猫間中納言 義仲の牛車と道う平兵
水島合戦	牛車の後ろから降りる義仲 船を出す平家追討軍と平家の佐舟 源平入り乱れての船戦	源平入り乱れての船戦		源平入り乱れての船戦
羽尾兼房	羽尾兼房が腹で舟光三郎を殺す2 船で赤巻を止める羽尾兼房 羽尾兼房に進軍する今井兼平2 城中の羽尾兼房を攻める今井兼平 退却する羽尾兼房を退却する今井兼平 2 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 3 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 3	舟光次郎を水中で仕留める羽尾 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 3 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 3		舟光次郎を水中で仕留める羽尾 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 3 舟光次郎を水中で仕留める羽尾 3
粟山合戦	進軍する義仲勢と遅れる行家勢2 行家勢を取り囲んで戦う平家軍 約て河内長野に遊れる行家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍	行家勢を取り囲んで戦う平家軍
藤野官	使者の藤野官を信る義仲 3 義仲退却を進言する知康 3 義仲に降参を進言する今井兼平 法住寺の知康と攻寄せる義仲軍2 法住寺炎上と攻めかける義仲軍3 法皇方の敗走と奥で遊れる法皇 探の積野、粉上の後白河法皇4 舟光の舟光 4 落ちのひる伴美主従 4 六条河原の首と脇間を挙げる義仲 法皇に明経らの死を伝える信朝2 思い上がる義仲を謀める覚明 熱田に御着る頼朝・頼朝軍2 知康を非難する頼朝 2 義仲の申出を拒絶する平家一門 師家を拱取につける義仲 2	知康を非難する頼朝か*	義仲に降参を進言する今井兼平* 法住寺の知康と攻寄せる義仲軍*	義仲に降参を進言する今井兼平 法住寺の知康と攻寄せる義仲軍

第十 巻段	林原義術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
	訪れた女房と語り合う重衛 2	訪れた女房と語り合う重衛 *		訪れた女房と語り合う重衛
	別れる惜しむ重衛と女房 2			
八島院元	院宣に目を通す宗盛			
誦文	重衛の助命を祈える二位の尼 重衛への手紙を讀む二位の尼 2	重衛の助命を祈える二位の尼* 文に目を通す男 *	重衛の助命を祈える二位の尼 *	重衛の助命を祈える二位の尼
	誦文を讀む後白河法皇			
成文	法然に後生の救いを求める重衛 法然に受戒の札を贈る重衛 2	法然に後生の救いを求める重衛* 法然に後生の救いを求める重衛 *	法然に後生の救いを求める重衛 *	法然に後生の救いを求める重衛
海道下	鎌倉へと護送される重衛 2 重衛と政を取り交わす熊野の娘	護送の奥* 護送の奥と街道の女達	鎌倉へと護送される重衛*	
	街道を下る重衛一行			
千手前	重衛に對面する頼朝 女房の世話を身をする重衛 女房の名を尋ねる重衛 2	重衛に對面する頼朝* 千手前と朗詠に興じる重衛*	重衛に對面する頼朝	街道を下る重衛一行 重衛に對面する頼朝 女房の世話を身をする重衛
	千手前をねがう頼朝			
横笛	原真を掛け出す重衛たち 2 横笛を追い返させる滝口入道 2 熊野山へ向かう滝口入道 2 滝口入道へ返状をしたためる横笛	横笛を追い返させる滝口入道* 滝口入道と合衆する人々 *	横笛を追い返させる滝口入道 *	横笛を追い返させる滝口入道
	滝口入道と對面する重衛			
高野	滝口入道に苦言を祈える重衛 高野山内を巡拝する重衛一行		高野山内を巡拝する重衛一行 *	高野山内を巡拝する重衛一行
重衛出家	滝口入道の修行を見守る重衛 出家する重衛主従 武軍に厚島への報告を命じる重衛 武士の一同とすれ違う重衛一行		出家する重衛主従* 重衛一行に與る武士の一同 *	出家する重衛主従
熊野参詣	熊野本宮に参籠する重衛一行 那智滝の重衛一行と晤する僧侶連 鳥の松に名を書き付ける重衛	那智滝の重衛一行 *	那智社の重衛一行と晤する僧侶	那智滝の重衛一行と晤する僧侶連 鳥の松に名を書き付ける重衛
重衛入水	入水する重衛	入水する重衛 *	入水のため沖に承出す重衛一行 *	
三日平氏	備前につく滝口入道と武軍 2 武軍の報告を聞く厚島の平家一門 崇徳上皇の意を執める神社建立 頼朝の鎌倉下向の任を断る宗清 宗清の不参を残念がる頼朝 頼朝を頼盛へ引出物を贈る 源氏と頼朝に飲れる伊賀・伊野の兵 頼朝の入水を知りて妻子たち 源氏朝夷の即位式 月夜に頼朝を慰み飲を誦む行慶 海を渡れぬ源氏を挑発する平家軍 語る源氏軍 *	備前と武士たち(大嘗会沙汰(1)か) 鳥の松の重衛一行*(高野2)か) 奥の院参拝の一行*(高野2)か) 頼朝は頼盛へ引出物を贈る *	武軍の報告を聞く厚島の平家一門	武軍の報告を聞く厚島の平家一門
頼戸	海を渡れぬ源氏を挑発する平家軍 語る源氏軍 *		頼朝の入水を知りて妻子たち *	頼朝の入水を知りて妻子たち
	漁夫から漁測を聞き出す盛綱 海に馬を乗り入れる盛綱 馬で押し渡って頼朝源氏と平家軍 厚島へ退却する平家軍 2	漁夫から漁測を聞き出す盛綱* 漁夫から漁測を聞き出す盛綱 *		漁夫から漁測を聞き出す盛綱 海に馬を乗り入れる盛綱
大行会之沙汰	御行幸の行列 2 遊び戻ける頼朝たち	文を讀む公卿と尼君*(頼戸2)か) 厚島の公卿たち*(頼戸4)か)		

第十一 巻段	林原義術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
逆捲	平家追討の院宣を受ける頼朝 2 行末を嘆く平家一門 頼朝頼朝と争論する頼朝 滝尾に給出させる頼朝軍 野火で先返する頼朝の陣	頼朝頼朝と争論する頼朝* 滝尾に給出させる頼朝軍 *	頼朝頼朝と争論する頼朝* 滝尾に給出させる頼朝軍 *	平家追討の院宣を受ける頼朝
逆捲合戦	上陣する頼朝軍 頼朝を引見する頼朝 能達の城を攻める頼朝勢 2 勝利を喜ぶ頼朝勢	能達の城を攻める頼朝勢	能達の城を攻める頼朝勢	頼朝を引見する頼朝
大坂経	厚島へと急ぐ頼朝軍 2 平家への使者を挿入する頼朝勢 厚島を急襲する頼朝軍 4 次々に名乗りを挙げる頼朝軍	厚島を急襲する頼朝軍	厚島を急襲する頼朝軍	平家への使者を挿入する頼朝勢 次々に名乗りを挙げる頼朝軍
朝信息脚	吉戦の末に射られる朝信 2 教経に射落される朝信 2	教経に射落される朝信 *	吉戦の末に射られる朝信*	朝信に射落される朝信
頼朝与一	朝信の死に泣く頼朝 朝信の首提を引合わせる頼朝 頼朝与一に馬を射るよう命じる頼朝 頼朝を射る頼朝与一 平家の武者を射倒す頼朝与一	朝信の首提を引合わせる頼朝* 馬を射る頼朝与一 *	朝信の首提を引合わせる頼朝* 馬を射る頼朝与一 *	
弓流	上陣して攻める頼朝たち平家勢 美原屋十郎の鎧をちぎった頼朝 弓を拾う頼朝をめぐり戦う高軍 語る源氏軍と政を見送る頼朝	美原屋十郎の鎧をちぎった頼朝* 弓を拾う頼朝をめぐり戦う高軍	美原屋十郎の鎧をちぎった頼朝* 弓を拾う頼朝をめぐり戦う高軍	
志度合戦	志度酒に過ぎませかける平家軍 2 教経に平家が負けたと語る頼朝 2 教経に降伏を勧める頼朝 2 退いて厚島に到着した頼朝勢 法皇に御兆を報告する神主	教経に平家が負けたと語る頼朝* 降伏した教経を連れ帰る頼朝 *	教経に平家が負けたと語る頼朝 *	教経に平家が負けたと語る頼朝
堀河合戦	頼朝軍に合流する頼朝軍 頼朝で進退を占う別当宗増 源氏軍に過ぎませかける宗増軍 頼朝と長時の同土討を止める源氏 巧みに戦う頼朝頼朝勢	頼朝で進退を占う別当宗増* 頼朝と長時の同土討を止める *	頼朝で進退を占う別当宗増 *	頼朝と長時の同土討を止める源氏
退失	平家軍に下知する知盛 重能に聞いた宗盛 いっせいに矢を射かける平家軍 平家に矢を射返すよう招く頼朝 頼朝の矢を射返す頼朝 仁井村四郎を射返す源氏与一 3 源氏軍に頼り降りる白旗	陸地で向い合い馬を射る軍(?) 船上で矢を射かける軍勢* 入り乱れて戦う高軍 *		仁井村四郎を射返す源氏与一
先帝御入水	源氏軍に頼り降りる白旗 海軍の大群の吉凶を占う平家軍 2 女房連に放籠を告げる知盛 帝とともに入水する二位の尼	帝とともに入水する二位の尼 *	帝とともに入水する二位の尼 *	
院政殿最期	海から引上げられる建礼門院			引上げられる建礼門院と詠く宗盛父子

第十一 巻段	林原真術館蔵 絵巻	明暦二年版本	真田宝物館蔵 絵本	明皇大学蔵 絵本
内侍所召入	内侍所の席敷を明けかける源氏軍	内侍所の席敷を明けかける源氏*		
	引き上げられる宗盛父子 2	引き上げられる宗盛父子	引き上げられる宗盛父子	
	乳母子の親類を見る宗盛	教経に追われ隠れて逃げる教経*		
	教経に追われて隠れて逃げる教経	教経に追われ隠れて逃げる教経*		
	実光兄弟を道連れに入水する教経	実光兄弟を道連れに入水の教経*	実光兄弟を道連れに入水する教経*	実光兄弟を道連れに入水する教経
二門大路控渡	平家軍と戦らばる宗盛	平家軍と戦らばる宗盛	平家軍と戦らばる宗盛	
	平家の逃亡を妻上する広綱	割裂する三人(桂屋出家②)*		
	洞に護送される平家の男女 2	修行者と侍連(桂屋出家④)*		
	控渡を迎えに鳥羽に向かう人々	僧道と通行人(熊野参詣①)*		
		社殿を拝む修行者連(熊野参詣①)	都に戻された御器*	
平大納言文之沙汰	二宮寛政の牛車を見送る女院	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち
	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち
	選る清宗に着物を掛ける宗盛			
	文箱の処遇を時忠に相談する時忠	文箱の処遇を時忠に尋ねる時忠*		
	文箱を時忠の娘に返す教経 2	文箱を時忠の娘に返す教経*		文箱を時忠の娘に返す教経
副将被斬	教経の所業に激怒する頼朝			
	副将を抱いて泣く宗盛	副将を抱いて泣く宗盛*	副将を抱いて泣く宗盛	副将を抱いて泣く宗盛
	副将を見送る宗盛父子			
	副将に斬りかかる兵士連 2	副将の首を斬る兵士連*	副将の首を斬る兵士連*	副将の首を斬る兵士連
	副将の首を斬る兵士連 2	副将の首を斬る兵士連*	副将の首を斬る兵士連*	副将の首を斬る兵士連
鎌倉	鎌倉の口上を奥まわって承る宗盛	鎌倉の口上を奥まわって承る宗盛*	鎌倉の口上を奥まわって承る宗盛	鎌倉の口上を奥まわって承る宗盛
	鎌倉へ護送される宗盛父子と教経	鎌倉に奥言する宗盛*		鎌倉へ護送される宗盛父子と教経
	頼朝に出言する宗盛と集まる兵士			
	金洗沢の関から追ひ返される教経	申し開きの状を書かせる教経*	申し開きの状を書かせる教経*	
	申し開きの状を書かせる教経	守する武士連*		
大僧院誅罰	頼朝の口上を奥まわって承る宗盛	頼朝の口上を奥まわって承る宗盛*	頼朝との対面を持つ宗盛父子	頼朝の口上を奥まわって承る宗盛
	洞に護送される宗盛父子	宗盛に引取を渡す僧*		
	首を討たれる宗盛	首を討たれる宗盛*	首を討たれる宗盛父子*	
	父の長柄を奪取る清宗			
	活された宗盛父子の首			
第十二 巻段				
重衝被斬	林原真術館蔵 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明皇大学蔵 絵本(第十二巻)
	北の方と対面する重衝	奈良へ送られる重衝*	奈良へ送られる重衝*	北の方と対面する重衝*
	駈を形見に北の方に送る重衝			
	北の方と別れる重衝			
	奈良の大衆に引渡される重衝 2	斬首される重衝*	斬首される重衝*	
大地敷	斬首される重衝	斬首される重衝*	斬首される重衝*	
	泣き悲しむ尼僧連(長谷六代④か)			
	大地敷に逃げまどう人々	大地敷に逃げまどう人々*	大地敷に逃げまどう人々*	
	御所へ返却する法皇の一行 4	御所へ返却する法皇の一行*	御所へ返却する法皇の一行	
	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱			
平大納言被流	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	
	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	
	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	教経の経巻を捧げ舞臺下向の文箱	
	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠
	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠
土佐房被斬	土佐房被斬	教経に起請文を書く土佐房*	教経に起請文を書く土佐房*	
	教経の要領をかける土佐房 2			
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	教経の要領をかける土佐房 2	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
判官被流	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
吉田大納言沙汰	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
六代	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
長谷六代	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
六代被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
女院御出家	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
小原入形	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
小原被幸	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
六道之沙汰	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
女院御住生	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	
	土佐房被斬	土佐房被斬	土佐房被斬	